京都帝國大學經濟學會

經濟論叢

第五十卷第三號

昭和十五年三月

論叢

勢力加速度の法則……文學博士 高田保馬

日本經濟理論に於ける主體性の發展 經濟學博士 石川興二

時論

地方稅制の改革を論ず……經濟學博士 汐見三郎

研究

ナチス住宅政策の原理……經濟學士 中川與之助

金史食貨志に見はれたる貨幣思想……經濟學士 穗積文雄

貨幣の資本的考察……經濟學士 中谷實

說苑

北支に於ける人口の分布と變動……經濟學士 菊田太郎

農業に於ける保險と信用の問題……經濟學士 西藤雅夫

パウル・アルント 日本に於ける低勞賃……經濟學士 青山秀夫

附錄

彙報

外國雜誌論題

貨幣の資本的考察

中谷實

一　序言

個人の自由なる經濟活動を基礎とする交換經濟に於ては、貨幣は市場に於ける價格機構を通じて、社會的生產物を其の社會の構成員の間に最も有效に配分すると共に、此れによつて生產そのものをも最も有效なる方面に指導する事が出來るのである。卽ち各個經濟主體は、自己の所得貨幣額と市場に於て需要供給の結果自然に成立する所の價格とを考慮して、最大限度に其の慾望を充足すると共に、より多く需要せられる財がより多く生產せられるが爲めに社會全體としても最能限度に其の慾望充足をなし得る事となる。[1] 此れ、個人にとりての效用の總和が其の社會全體の效用と等しきものとせられるが爲めに他ならず、斯かる交換經濟を前提する時には貨幣は先づ社會的生產物の配分と言ふ側面より觀察せられ、其の本質をば一般的交換手段たる點に求められねばならぬのである。

然るに現時の我が國に於けるが如く、經濟全般が尙交換經濟でありながら自由主義の基礎を離れて次第に統制經濟の色彩を濃厚にし來ると、價格も亦市場に於て自由に成立する事を許されずして此れに强力なる統制が加へられ、遂には官廳的に公定せられるに至つたのである。勿論現實に於ては、所謂闇取引の往行によつて公定價格

1) G. Cassel; Theoretische Sozialökonomie Kap. 3.

制は必ずしも有效に行はれてゐるとは言ひ得ないかも知れないが、少く共、所謂九・一八物價停止令によつて我國の諸物價は一般的に一定の水準以上に引上げる事を許されざるものと考へ、其の前提の下に於て我國の貨幣現象を考察する事は强ち無意義なる事と言ひ得ないであらう。今此の考察が許されるとすれば、現時の我が國に於て貨幣は如何なる職能を營みつゝあるか。言ふ迄もなく我が國は、支那事變勃發以來直接の軍費と生產力の擴充との爲めに國內に多額の通貨を放出してゐるのであるが、其れが如何なる經路を執るにせよ結局は國民の所得となるものであつて、公債の買入及び其の他の方法によつて貯蓄せられた部分を考慮しても、尙國民の消費し得可き所得貨幣額は今日著しく膨大せるものと言はねばならぬであらう。然るに他方に於て、通貨の膨脹によつて擴大せられたる生產の結果は、其の少なからざる部分が戰場に於て消耗せられ或は消耗せらる可き運命にあるか、或は中間生產物又は資本財と謂はる可きものであつて、國民の所得貨幣の使途に當る可き完成消費財は著しく減產せられたと見ねばならない。而も價格の騰貴が抑壓せられてゐる限りに於ては所謂消費者余剩が現はれ來つたと言ひ得るのである。そこで若し、斯かる消費財の價格が市場に於て自由に成立する事を許されるならば、假令價格の騰貴によつて貨幣單位當りの消費財に對する分前が減少するとしても總ての所得貨幣が其の使途を見出し得る譯であるが、現今の如くに消費財の價格が騰貴する事を許されない場合には總ての貨幣が其の使途を見出し得ずして、一部分の所得貨幣は其の購買力を實現し得ない事となるのである。否消費の面に於てのみならず、生產の面に於ても資材の配給上切符制度を採れる部面では、貨幣のみを以て資財を獲得するを得ずして貨幣と切符との兩者によつて初めて購買力を實現し得る狀態にあるのである。

斯くて現時の我國民經濟に於ては、經濟が交換の基礎の上に立ちつゝも價格が市場に於て自由に成立する事を許されてゐないが爲めに、貨幣をば社會的生産物を其の社會構成員の間に配分すると云ふ側面より觀察して、此れを一般的購買手段又は一般的交換手段と解する事に若干の困難を伴はざるを得ない。然らば貨幣を以て、純粹なる交換經濟卽ち自由主義の基礎の上に立つ交換經濟に於てのみ存在し得るものと解し、經濟が自由主義の基礎を離れて統制經濟の色彩を濃厚にし來れば貨幣も又其の存在理由を失ひつゝあるものと見る可きであるか。此の考へ方を推し進むれば、經濟統制が更に强化せられて所謂計畫經濟の域に達し、總ゆる財貨勞務が交換によらずして切符制度により又は其の他の方法によつて政府より配給せられる事ともなれば、貨幣は全く消滅し去るものと考へねばならぬであらう。然し乍ら此の場合と雖も、財貨勞務が何らかの標準によつて配分せられる限りは、其處に交換手段又は購買手段としての貨幣では無く單に價値單位としての貨幣は殘存する事であらう。そこで、完全なる計畫經濟に迄は到らず依然として交換經濟の基礎の上に立ちつゝも尙個人の自由なる經濟活動が强度に拘束されてゐる我が國民經濟に於ては、貨幣も亦純粹なる交換經濟に於ける場合とは異つて、若干其の本質なり價値なりが歪曲せられ又は制限せられ來つたものと見る可きであるか。勿論私は貨幣を以て本來純粹交換經濟に固有なるものと見るのである。然し乍ら交換經濟が强度に制限せられた現狀に於て、貨幣が次第に其の存在理由を失ひ來つたとか、又は貨幣が本來の本質なり職能なりを發揮し得ないのは當然の事なりとして此れを無視する事をなさず、現在の實狀の下に於て貨幣の本質及び其の價値の基礎付けを試みる事も亦無意義ならざる事と考へるのである。卽ち私は、貨幣を資本の側より考察する事によつて問題の解決を試みたいのである。

二　抽象的資本としての貨幣

貨幣は謂ふ迄もなく一般的交換手段である。即ち貨幣は購買力其のものでは無くして購買力の主體は人であるが、貨幣は購買力の標識たる事によりて、社會的に見れば一般的交換手段となり貨幣所有者の立場よりは一般的購買手段となる。故に貨幣は購買力の標識たる事によりて、其の社會に流るる財貨勞務及び用役等を社會の各構成員の間に分配すると共に貨幣所有者に對して斯かる財貨勞務及び用役を獲得する力を與へるものであるが、斯くして分配せられ獲得せられたる財貨勞務及び用役等は、或ひは生產の爲めに用ひられ又は消費の爲めに用ひられるのである。前者の場合には貨幣は抽象的なる資本として考へられるであらうし、後者の場合には貨幣は抽象的なる消費手段と考へられるであらう。然らば今日の我國の如き國民經濟に於ては、貨幣を抽象的資本として考察する事と此れを抽象的消費手段として考察する事と、其の何れがより適切なる解答を與へるであらうか。

先づ貨幣を抽象的なる消費手段として考察するに、自由なる交換經濟に於てならば、或程度まで斯かる考察の正當性を主張し得るであらう。即ち、經濟の終局の目的は消費であり貨幣所有者は各自消費による效用の格付けに從つて市場に提供せられたる財貨勞務等に對して購買力を發動するが故に、所謂價格機構を通じて生產の方向をも指導する事となるが故である。[2] 然し乍ら其の場合に於ても、購買によつて自由に處分され得る勞働や財貨用役等は、其の大なる部分が現在の消費の目的にでは無く多少共消來の消費の目的の爲めに使用せられるのであつて、或る一定時點における社會には種々成熟の段階を異にせる未完成生產物又は中間生產物が夥しく存在してゐ

2) Cassel, a. a. O.

るのである。[3] 又貨幣によつて實現せられる購買力の大きさは諸價格の高さに依存すると共に、貨幣數量は其の時々に於ける生産力を規定する總ゆる事情殊に金利との關係によつて如何程でも生産者の爲めに增大せしめられるが故に、一定額の貨幣によつて實現せられる消費力は其れに應じて制限せられざるを得ないのである。況んや現時の我國に於けるが如く、假令消費の爲めに使用し得べき所得貨幣額は如何に膨大であつても、市場に提供せられたる消費し得可き財貨勞務は極めて少く、殊に價格の公定が施行せられてゐる爲めに一部の貨幣は消費の爲めに購買力を發動せしめ得ない現狀に在つては、抽的消費手段と云ふ觀點より貨幣を考察する事は到底許され得ないのである。

次に抽象的資本の觀點より貨幣を考察しやう。舊來古典學派に於ては資本は勞働及び土地と並んで第三の生産要素と考へられてゐたのであつて、[4] ジェヴオンス[5]によつて、初めて資本が「勞働の進行中總ての種類の勞働を養ふに必要な財の集り」と解せられ、其の機能が全く「勞働者をして長期に亘る勞働の結果を待ち得る狀態に置く事」に存する事が明確にせられたのであるが、更にボエーム・バヴエルク以來、資本の經濟的作用が迂回生産の利益に存する事、換言すれば、生産要素即ち土地其の他の自然的要素と勞働との使用を益々迂回的ならしめ以て此等生産用役の能率を增進せしめる事、從つて生産の增加を齎らす事に存する所以が明らかにせられたのである。斯くて資本が、迂回生産の延長が生産の增加を齎らすと言ふ經驗的事實に基いて迂回生産の延長の爲めの手段と解せられる以上は、資本は最早や第三の生産要素と解せられる事が出來ず、從つて資本を以て一の獨立の生産要素と解する事が不可能である。即ち資本によつてより有利なる迂回生産が可能となるのであり、其の事は與へられ

3) Böbm-Bawerk; Poaitive Theorie des Kapitals, Bd. 1. Abschn, II.
4) A. Smith; Wealth of Nations Vol. 1. Book. 1.
5) W. St. Jevons; Theory of Political Economy, 2. ed. p. 223.

たる土地勞働及び其の他の生産要素の用途が與へられたる生産技術の條件の下に於て何らかの變更を受くる事を意味するものであつて、此の意味に於て資本の作用は經濟過程の變革と關聯するものである。[6]

又一方に於て、如何なる經濟組等の下にあつても、生産の遂行の爲めには土地其の他の物的なる生産手段と人間の勞働とが或る特定の人格的主體の下に統合せられる事が必要であつて、生産に必要なる力は物的なる生産手段と人間に對する指導權とが一の主體に歸屬する事によつて發生するものである。[7] 而して斯かる物的生産手段の支配と人間勞働力の指導との統合は、共産主義の社會に於ては國家の手に又封鎖的家内經濟に於ては其の家長の手に歸するものであるが、[8] 現時の交換經濟に於ては企業家によつて行はるゝ事は言ふ迄もなき所である。然らば企業家は如何にして斯かる生産諸要素の統合をなし得るか。此の際企業家が新たなる生産組織を確定し從つて經濟過程の新たなる構成をなし得る要素は、前述の如く資本の作用によるのであるが、此の資本は先づ貨幣の形態を執つて現はれるのである。

右の如く、迂回生産の延長手段たるものが資本であり、而も企業家は貨幣の所有によつて獲得したる購買力を發動して勞働力と物的生産要素とのより有效なる使用を企圖するものなる限り、卽ちより延長されたる迂回生産を企圖する限り、茲に貨幣は抽象的資本として觀察せられるのであつて、貨幣は購買力の標識たると同時に資本たる性格を賦與せられてゐるのである。[9] 然らば貨幣を抽象的資本として觀る立場より今日の貨幣現象は如何に說明せられ得るか。謂ふ迄もなく今日我國に於て國策の第一に擧げられてゐるものは生産力の擴充であり更に言へば生産設備の擴充である。我國に於ける貨幣の流れの大半は此の生産設備の擴充の爲めに資本としての作用を營

6) 中山伊知郎；均衡理論と資本理論 120—122頁。
7) Rudolf Hug; Das abstrakte Kapital als wirtschaftliche Gestaltungsmacht, Zur Wesenserklärung des Geldes," Finanzarchiv Neue Folge Band 6, Heft 4, S. 678.
8) a. a. O. S. 679.　9) a. a. O. S. 671.

んでゐる。而して此の資本としての作用をした貨幣の流れは結局に於て勞賃其の他の所得購買力となつて現はれるであらうが、此の所得購買力は、消費財量の減少と價格の公定とによつて、充分に其の力を發揮し得ずして再び資本として作用す可く還流するのである。卽ち、消費の爲めの貨幣使用が極力制限せられてゐるのみならず輕工業よりも重工業の設備の擴充の爲めに資金の大半が振向けられてゐる事は、迂回生產のより延長の爲めに貨幣が資本として使用せられてゐるものと見らる可く、一般的交換手段たる貨幣の特質よりも抽象的資本としての其の性格がより強く現はされてゐるのである。勿論今日國策として企圖せられてゐる所の生產設備の擴充卽ち迂回生產の延長の度合が、與へられたる資源勞働及び生產技術と適合せるや否やは問題であらうが、それは茲での問題とする所ではない。更に又、今日一部の生產部門に於ては資本として貨幣を使用する事が抑壓せられ居るではないか、又軍備の擴充そのものが迂回生產の延長と見らる可きや等の疑問が生ずるであらう。此の問題は後にも考察するであらうが、此れに關して一言すれば、生產の增加と云ふ事は必ずしも各個人の消費對象を增加する事に意義が存するのではなく、國民經濟にとつて最大の效用を作出する事に意義ある所以を考へねばならぬのである。最後に又、今日勞働者其の他生產に協力するものは、其の得たる所得貨幣を以て消費せんが爲めに生產に協力するのであつて、其の限りに於ては貨幣に於ける消費手段たる性格が無視出來ぬではないかとの疑問も起るであらう。然し乍ら此の點については、今日獨逸に於ても、勞働者は單に勞賃の爲めに勞働するのでなく國民全體の生命と其の維持の爲めにするのであつて、生產に協力す可き意志と用意が消費よりも前に要求せられてゐるのであり、[10] 況んや我國に於てはより强き意味に於て國民精神の道德的要求が存する事を知らねばならぬのである。卽ち右によ

10) a. a. O. S. 681.

つても、今日の我國に於ける貨幣現象が資本的考察によつてよりよく解明せられ得るものと言ひ得るであらう。

三　貨幣價値の資本的考察

貨幣が抽象的資本と解せられるならば、貨幣の價値は何に基くのであるか。所謂金屬說又は商品說の立場よりすれば、貨幣は一面金屬そのものであり商品であるから、貨幣は地金としての使用價値と、此れに基いて他財獲得手段としての交換價値とを持つてゐる。勿論前者は本來的なる貨幣の價値ではなく、貨幣の價値と云ふ時には常にその交換價値が意味せられてゐるのであるが、[11]此の立場に於ても貨幣の價値は地金としての他財との交換能力に注目せられてゐるのであるから、而も常に素材の價値を以て貨幣の價値の基礎に置いてゐるのである。成程貨幣成生の歷史を顧みるならば或は右の如き主張も是認せられるであらうし、又現時に於ても國際貨幣にのみ注目するならば此れを否認す可き必要も存在しないであらう。蓋し路傍の人には財の價値は認識され易いが物的根據なきものゝ價値は理解され難いのであつて、秩序なき經濟社會又は國際的取引に於ては素材價値によつてのみ貨幣の購買力が保證せられ得るが故である　然し乍ら秩序ある貨幣制度が打立てられ市場組織の存續に對する一般的信賴が貨幣の購買力を保證するに至れば、も早や貨幣の價値を其の素材價値に求める事は不可能となる。[12]即ち素材價値の名目價値よりも遙かに少き貨幣が出現したり、地金の價値が却つて貨幣の價値によつて決定せられると云ふ事實は此の事を裏書するものであつて、現時の我國に於けるが如く市場組織の信賴に若干缺くる所があつても、尙金屬說の立場より貨幣の價値を說明する事は到底許され難く、世界各國に於ける現實の事實は益々名

11)　高田保馬；經濟學新講　第三卷　242頁。
12)　拙稿；貨幣と金（經濟論叢昭和十四年十月號。）參照

目說に傾きつゝあるものと言はねばならない。[13]

然らば貨幣自體に價値を否認して、貨幣にはたゞ一定の名目的通用力のみを認めんとする純粹なる名目說又は記號說の立場よりすれば、何等の矛盾なく今日の貨幣現象を說明し得るであらうか。謂ふ迄も無く、名目說には(一)購買さる可き財量の存在(二)貨幣と交換に財を提供す可き人の存在及び(三)價格水準の不變と云ふ三つの前提が必要である。而して自由經濟に於ては、(一)の前提は充され(二)及び(三)の前提は習慣に對する信賴換言せば連續性に對する期待の上に成立すると言ひ得るのであるが、[14] 今日の如く消費財量は不足し價格は公定せられても其の價格にて財の購買に困難を感ずる時には、右の三前提の中第三の前提が名目的に維持せられるのみであつて、(一)及び(二)の前提は充分に充され得ないと言はねばならぬであらう。特に貨幣自體に全然價値を認めない時には、人は何故に貨幣と交換に財を與へるかを理論的に說明する事が愈々困難となるのである。[15]

斯くて貨幣の價値を其の素材に求める事を拒否しつゝも、貨幣の交換手段としての機能又は他財を購買せしむる能力より由來する所の機能價値を認めんとする機能價値說が出現せねばならぬ事となるのであるが、此の機能價値は現時の實情より此れを如何に解す可きであるか、斯かる機能價値は、廣義に於ては或は貨幣によりて獲得せられる財の使用價値を意味し又は貨幣の客觀的交換價値卽ち他財の一定數量との交換能力そのものを意味するのであるが、普通は後者の見解に從つて、貨幣の價値は貨幣單位によつて購買せられる商品の數量によつて表示せられると考へられてゐる。然し乍ら此の見解に從ふ時には、貨幣が如何なる商品と交換せられるのか交換能力の性格を示すに不充分であつて、現時の我國に於けるが如く貨幣の交換能力が專ら資本的方面に集中せられてゐ

13) 楠見一正；正貨準備の意義の變化と管理通貨（經濟雜誌 第五卷 第五號）。
14) 高田保馬；前揭書 244頁。
15) Hug; a. a. O. S. 686, 689.

る事情を表現し得ないのである。更に此の立場に於ても貨幣における交換能力の根據は市場組織に對する信頼と云ふ點に求めるの他なく、現時の我國に於けるが如く市場組織に對する信頼が若干缺くる所ある場合には、未だ不充分なるを免がれ得ないであらう。故に私は、貨幣の交換手段たる機能が現時に於ては專ら資本的方面に集中せられてゐる事實より、貨幣價値の根據を、貨幣の抽象的資本としての機能卽ち資本としての生產力そのものに求め、人が貨幣と交換に財を提供するのも亦此の生產力の爲めであると解したいのである。

四　消費と資本形成の意義

右の如く私は、現時に於ける我が國民經濟の實情より、貨幣をば抽象的資本と解し貨幣の價値が資本の生產力によるものと解するのであるが、然らば我が國に於て今日行はれてゐる所の生產力の擴充が眞の意味に於て資本の形成と考へられるか。此の點は前に一應留保した所であるが今や改めて此の檢討がなされねばならないのである。卽ち先づ資本の作用は迂回生產の延長にあり、それは現存生產諸要素のより有效なる使用によつて經濟過程を變改し生產の增加を企圖するものであるが、此の生產の增加は本來消費の增加と云ふ目的の爲めになされるものである。然るに我國に於て生產力の擴充が叫ばれる場合、それは一般的に重工業方面に於ける生產力を高める事を意味してはゐるが、實は重工業方面に於ても特に軍備の擴充に其の重點が置かれてゐる事が明らかである。此の場合軍需品の生產增加が本來的意味に於ける消費の增加と云ふ目的に合致するや否や。完成軍需品が消費財の範疇に屬する事も言ひ得ない譯ではないが、一般國民の消費對象とは餘りにも懸離れてゐるが爲めに、軍需生

産設備の擴充の爲めに資本が用ひられる事が、眞の意味に於て迂回生産の延長と云ふ觀念と一致するや否やが問題となるのである。故に以下若干消費の意義を檢討する事によつて問題の考察を試みる事としやう。

先づ迂回生産による生産增加が消費の增加を目的とせる事は言ふ迄もないが、生産行爲否總ゆる經濟活動の目標はすべて此れ消費にあるものと言はねばならぬであらう。[16] 而して國民經濟に於ける消費の全體が其の構成員たる各個經濟の消費の總和である事も明らかである。然るに他方に於て、總ゆる經濟活動の目標が消費にある所以のものは消費によりてのみ效用が實現せられるが爲めに他ならず、而も國民經濟全體にとりての效用は各個經濟にとりての效用の總和と一致するものでは無くそれ以上のものである。[17] 故に今、若し完成軍需品の消耗を國民的消費と考へるならば、軍需生産設備の擴充の爲めに資本が用ひられる事は明らかに國民的消費の增大を目的とせる生産增加であらねばならぬし、又假令軍需品の消耗をば國民的消費の範疇より除外しても、其れは必ずしも資本の誤用と言はる可きものでは無く、直接各個經濟にとりての效用は增加しなくても國民經濟全體にとりての效用を增加すると云ふ點に於て資本使用の目的に合致するものと言ひ得るのである。而して又、國民經濟全體にとりての效用が各個經濟にとりての效用の總和ではなくそれ以上のものであると云ふ事の論據には、必ずしも獨逸流の全體主義世界觀を援用する必要もなく、各個經濟主體の單なる集合に過ぎざる交換經濟に於ても、共同慾望の充足による大なる效用が各個經濟主體には直接に自覺せられない事によりても明らかなる所であらう。

然らば次に、今日我國に於ける生産力の擴充が資本の形成と見られるならば、斯かる資本の形成は如何なる意義を有するか又何が故に是認せらる可きか。此れを解明する事は、貨幣を抽象的資本と見る見解を一層强く裏書す

16) H. Jäger; "Verbrauch und Sparen als sozialökonomische Kategorien" Finanzarchiv Neue Folge, Band 7, Heft 2 S. 262.
17) a. a. O. S. 263.

る事となるが故に、以下若干の考察を附加する事とする。先づ各個經濟に於ける事情を見るに、個人と雖も決して今日の生命を維持する事のみを考へてゐるものではなく、多かれ少なかれ明日以後の生命の維持を考へて生活してゐるものであつて、將來に對する準備を全然怠つてゐるものではない。卽ち各人は自發的に所得の一部を節約して將來に於ける不時の出來事に備へ又は將來の發展の爲めに準備を考慮するものである。然し乍ら今日の社會に於ては、斯かる自發的なる節約は專ら貨幣によつて行はれ謂はゞ單に名目的なる準備をするに過ぎないのであつて、此れが果して國民經濟全體にとつても眞實のオプチマルな準備となり資本形成となるや否やは一つの疑問として殘るであらう。蓋し一方に於て貨幣による貯蓄をする者があつても、他方に所得以上の濫費をなす者があれば、國民經濟的には資本の形成は行はれず單に個人相互間の保險が行はれるに過ぎないからである。尤も斯かる名目的な貯蓄も國民經濟的に何等の意義が無い譯ではなく、或る個人が貨幣によりて貯蓄をして置いた爲めに不時の場合に其の生命を維持し得たならば、而して彼の生命の維持が國民經濟全體にとりて重要なる意義を持つならば、斯かる名目的なる個人の貯蓄が國民經濟全體にとりても亦重要なる意義を持つ事となる。然しながら一般的に見て、國民の大多數は小所得者より成るものであり、所得の小なる者程將來における需要の效用よりも現在に於けるそれの方を重視するが故に、更に又國民經濟全體にとりては、各個人の生命を保險するが爲めに各人が適當と考ふる準備の總和以上のものが必要とせられるが故に、個人の自發的なる節約のみによりては國民經濟全體にとりてのオプチマルな準備オプチマルな資本形成を期待し難いのである。[18] 殊に全世界が益々ブロツク經濟化しアウタルキー化すると共に、各國際間の政治的摩擦が國際的及び國內的兩經濟に對して重大なる影響を與へ

18) a. a. O. SS. 276-284 參照。

るやうになり來れば、國民經濟的に必要なる資本形成は到底個人の自發的なる貯蓄意志に委しては實現し得られず、何らかの意味に於ける强制節約而も名目的なる貯蓄ではなく實質的なる資本形成が要求せられる事となる。今日我國に於ける生產力の擴充による資本形成は正に右の如き意義を持つものであつて、それは直接的に將來に於ける人口の增加やそれに伴ふ消費增加のみを目標としたる資本形成ではないが、斯かる事情よりもより重大なる政治的及び經濟的理由より是認せられねばならぬであらう。今假りに斯かる政治的經濟的の諸理由が無視せられ得るとするならば、各個人の消費性向に從ふ節約率によつて、國民經濟的にもオプチマルな資本形成が自然に成立すると考へられるかも知れないが、個人の消費性向には多分に心理的なる要素を含むと共に其の將來への見透しも必ずしも正鵠を得たものとも云ひ得ないが故に、自然に成立する狀態は常に必然的に最も正しきものとも確言し得ないのである。

五　結　言

以上私は此の小篇に於て、現下の我が國民經濟の實情に卽して貨幣を考察し、貨幣が抽象的資本として解せられ貨幣の價値が資本としての生產力に基くものと解せられる時に最も合理的なる解決が得られる所以を明らかにしたのである。卽ち先づ、支那事變の勃發以來政府は巨額の公債を發行する事によつて通貨の著しき膨脹を惹起し、それに伴つて國民所得も全般的に見て著しく增大したのであるが、他方に於て生產力の擴充軍備の擴充によつて國民の消費し得可き社會的生產物が著しく減少せしと共に、價格の公定によつて物價騰貴が極力抑制せられ

た結果、總ての貨幣は其の購買力を實現し難き事となり、一般的購買手段としての貨幣の特質に若干考慮を加へねばならぬ事となつたのである。そこで私は、近代資本理論による資本の概念を援用して、現代の我國に於ける貨幣が專ら抽象的資本の性格を有するものとして考察せられねばならぬ所以を論述したのであるが、更に今日の我國に於ける生產力の擴充や軍備の擴充が果して本來的意味における資本形成と見做され得るや否やについて若干の問題が存する故、後節に於て此の問題を取上げたのである。卽ち軍備の擴充の如きは、一見する所國民の消費を增大する所以ではないから、經濟活動の究極の目標とはなり得ず從つて本來的意味における資本形成と考へ得ざるが如くであるが、實は消費による效用を見ても、個人の直接的消費の總和は國民經濟全體の消費に一致するが、個人にとりての效用の總和は國民經濟全體にとりての效用よりも小なる所以と今日の經濟を指導する原理に純粹經濟的理由よりもより重要なるものの存する事とによつて、軍備の擴充も亦一の資本形成と見らる可き事を述べたのである。

又貨幣を抽象的資本と見る以上、貨幣の價値も亦資本との關聯に於て求められねばならぬのであるが、從來の金屬說及び純粹名目說が共に現時の實情を說明するに足らざる所以を明らかにしたる後、貨幣の價値の基礎を資本の生產力に求めたのである。今此の點について若干說明の補足をするならば、人が貨幣に對して財を提供するには貨幣自體は何らかの價値がある事を必要とするのであるが、而も此の貨幣の價値は金屬說の云ふが如くに素材の價値によるものではない。又貨幣の價値が財の價値を反映せるものであると見ても、其の場合、貨幣の所有者が過去に於て財の生產に貢獻したが爲めに其の結果生產されたる財の價値が彼の所有せる貨幣に反映せるもの

と見る事は不可能であつて、斯かる見解を取る時には、今日の我國に於けるが如く完成消費財の數量が減少し而も所得貨幣量の大なる場合を說明し得ないのである。そこで貨幣が財の價値を反映すると見るには、その財たるや、貨幣が資本として用ひられ其の結果將來に於て生產せられる所の財と見られねばならず、此の見解を取る時には現時の我國に於ける貨幣の價値が最も都合よく說明し得られるのである。現に今日各種の貨幣は、政府又は發券銀行により或は預金銀行により種々なる形態をとりて創造せられてゐるのであるが、此等の貨幣が新たに創造せられたる瞬間について見たならば、斯かる貨幣が如何にして現存の社會的生產物に對して購買手段たり得るか。貨幣の價値に關して、過去に於ける財の生產への貢獻と云ふ事を重視する限りは、此の點の說明に多大の困難を感ずるであらう。普通には、新たに創造せられたる貨幣と同種の貨幣が既に市場に於て購買手段として用ひられてゐるが故に、此の新らしく創造せられたる貨幣も亦購買手段たり得るものと考へるのであるが、若し此の場合に、新らしく創造されたる貨幣が抽象的資本として財の生產を增加せしめ得可き作用を持ち、此の作用に基いて今後生產せられる可き財の價値が新創造貨幣をして購買手段たらしめてゐると考へるならば、理解は遙かに容易となるであらう。而もかゝる解釋は現時に於ける貨幣事象を說明するに最も便利にして且つ合理的なる故、私は貨幣の價値も亦其の基礎を抽象的資本としての生產力に求めたのである。